

# れいぎさほう シンプルな礼儀作法

キャロルとリオラが笑いながらろうかをかけ降りて来ると、ちょうど書類や資料の山を持って職員室の前を通りがかったジョーにぶつかってしまいました。ジョーがよろめくと、書類の山はそこら中に散り散りになってしまいました。

「何だよ!!」そのまま走り去ろうとする二人に、ジョーが声を上げました。

「ごめん! 今やってる工作のために、備品室へ紙を取りに行くところなの。」肩越しにリオラが大きな声で言いました。二人はあっという間に角を曲がって姿を消しましたが、キャッキヤとはしゃぐ声は、まだろくに鳴りひびいていました。

「ああ、どうしよう?」備品室にかけこんだキャロルが言いました。「オレンジ色の工作用紙は、一番上のたなだわ。私達には、まず届かないわね。」

「さっき職員室の前を通った時、マーケル先生がいたわ。マーケル先生に取ってもらいましょうよ。」そうリオラが言うと、二人は備品室を飛び出しました。

「マーケル先生!」二人は、職員室でこちらに背を向け、机に向かってすわっている先生に呼びかけま

した。「マーケル先生! 備品室に、取ってほしいものがあるんです。先生!」

マーケル先生は振り向いて、くちびるに指を当てました。先生は電話中だったのです。

「オレンジ色の画用紙に手が届かないんです。」キャロルは頼み続けました。明らかに、先生の言いたいことがわかっていないようです。「取ってもらえませんか?」

そこへタイナ先生が通りかかりました。「私が取ってあげるわよ。」タイナ先生は、親切にそう言ってくれました。

「よかった。」リオラはほっとして言いました。「先生、こっちです。」



よくあさ 翌朝のことです。3年生の担任であるギニソン先生が、時間になっても来ません。子供達は、20分以上も待ちました。やっと先生が来ると、先生はあいさつもせず、おくれた理由を何も説明しないまま、いきなりローマ帝国の歴史の授業を始めました。



「古代のローマ時代と今とで、ちがう点を言える人は？」授業をしばらく進めた後で、先生が質問しました。

何人かの人が手を上げました。「はい、ウィリアム？」

「一つは、人々は旅をするのに・・・」

「昔はたくさん歩かなければならなかったということね。」ウィリアムが答えを言い終わる前に、先生が代わりに答えを言っていました。

まるでウィリアムを無視するかのように、先生が口をはさんで答えてしまったので、子供達はおどろきました。歴史の授業中、先生はずっと、そのような調子でした。

さて、歴史の授業が終わり、10分間の休み時間になりました。子供達が教室の外に出ようとドアの方へ歩いていくと・・・突然、ギニソン先生が子供達を押しつけ、何も言わずに真ん中に割りこんで、そのまま出て行ってしまいました。

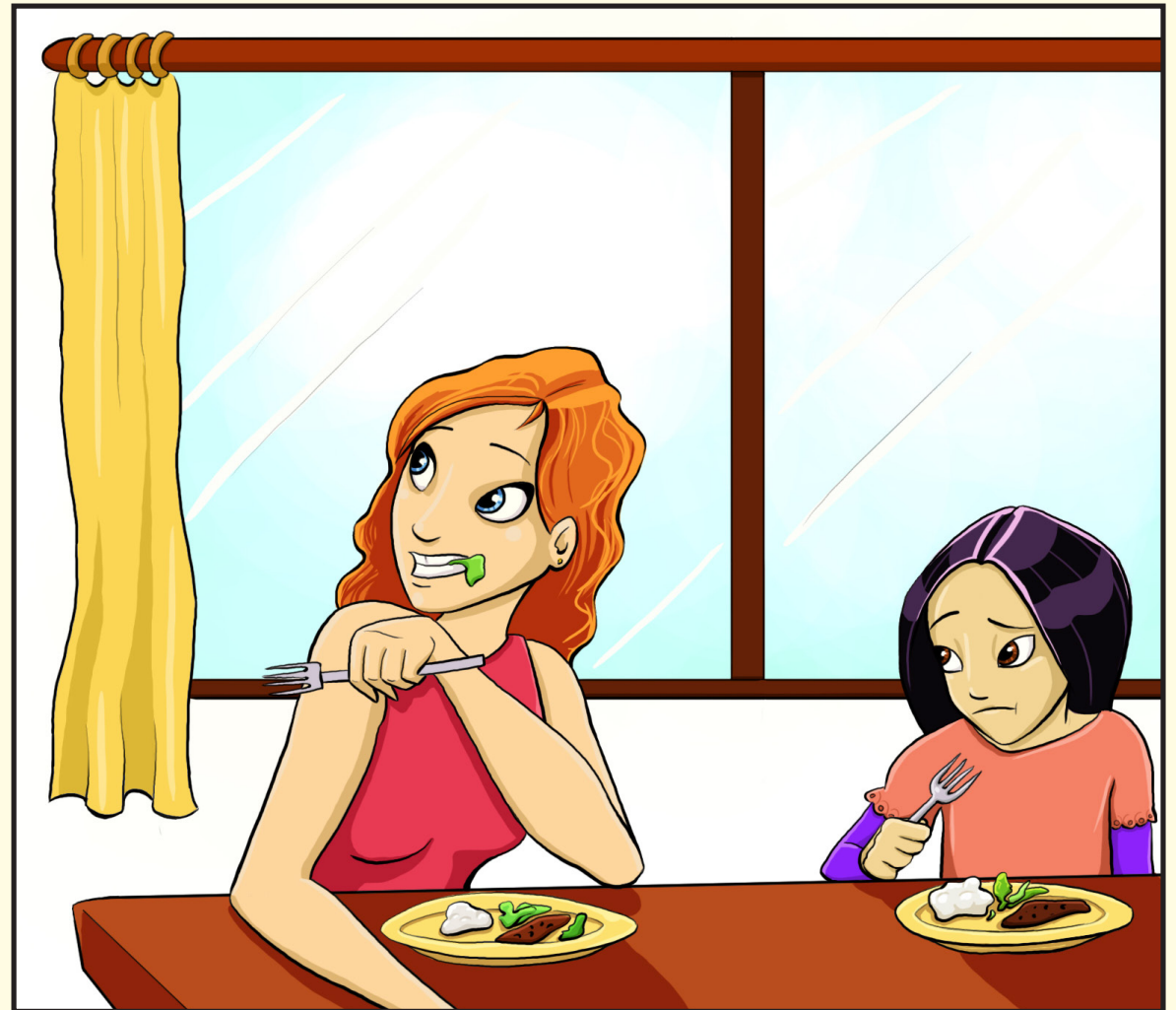
教室の外では、キャロルがマリッサとリオラに、今週末両親が連れて行ってくれると言っていた遊園地の話をしていました。どんな乗り物があるかキャロルが説明していると、急にギニソン先生が近づいてきてキャロルの話に割りこみ、先生の上着をすぐに戸だなから取ってくるようにとマリッサに言うと、そのまま行ってしまいました。

リオラはキャロルの方を見て言いました。「今まで、ギニソン先生があんなふうにするなんて、見たことがないわ。あなたは？」

「私もよ。」キャロルが答えました。「先生、私達がいたことさえ、まるで気づいていないかのようだったわね。」

このきみような行動は、給食時間も続きました。ギニソン先生がウィリアムを押しつけて水を取ろうとしたので、彼はもうちょっとでフォークを口につっこむところでした。

それから、リオラが野菜に塩をかけていると、ギニソン先生が塩をひたたくてしまいました。何も言わずにです。そして、自分の食べ物に塩をかけると、テーブルにひじをつき、口を開けてぐちゃぐちゃ音を立てて食べ始めました。お腹がペコペコだとか何とか口走りながら食べていると、口の中からレタスが飛び出して皿の上に着いたので、子供達はショックを受けてしまいました！



給食が終わると、ギンソン先生はふつう、決められた話をめいめいで20分ほど読書させます。その間、静かに午後の授業の準備をしますが、今日はちがいました。コンピューターで音楽をあれこれと選曲し、それをスピーカーで聞き始めたのです。ある曲をかけたかと思うとそれを止めて、次の曲をかけました。ほとんどの子供達は、読書に集中するのに苦労していましたが、ギンソン先生は周りにむとんちゃくな様子です。

20分ほど経ちました。ギンソン先生は音楽を止め、いすにすわり直して生徒達を見回しながら、にっこりとほほ笑みました。

「では、本を片付けて。今からみんなに説明したいことがあるの。」と、ギンソン先生は子供達に言いました。

「まず初めに、今日の私の行動で、何か気がついたことはある？」

みんな、シ〜んとだまっています。

ギンソン先生はにっこりしました。「今日の私の行動について、何か言いたいことはない？」

またもや沈黙です。

「今日の私の行動は、あなたたちに対して礼儀正しく思いやりがあったと思う？」

すると、みんながいろいろと意見を言い始めました。

「そうは思えませんでした。」と、ジョーが答えました。

「ぼくが質問に答えようとしていた時、最後まで言わせてもらえませんでした。」

ウィリアムも言いました。

「水差しを取ってと言う代わりに、ウィリアムを押しつけて取ろうとしました。」マリッサも言いました。

「音楽で気が散って、読書に集中できませんでした。」アランも言いました。

「今朝 どうして授業時間におくれたか、その理由を説明してくれませんでした。」とキャロルが言いました。「それから、私がマリッサやリオラと話していた時、断りもせずに会話に割りこんできました。それだけではなく、マリッサに頼んでもいいかどうか聞きさえせず、すぐに先生の上着を取ってくるようになって言いつけました。」

ギンソン先生が生徒達の気持ちをきずつけたり、気分を害したり、ひどいふるまいをしたり、愛想が悪かったりした点について子供達が話すのを、先生はじっと聞いていました。

「今日私はあなたたちに対して、とてもふるまいが悪かったわね。」とギンソン先生が言いました。「事実、今日の私のふるまいを一言で表すとしたら、何て言葉になるかしら？」

「無作法ですか？」ウィリアムが聞きました。

「ええ、その通りよ。今日はみんなが、だれかに無作法にされるとどんな気持ちができるかを経験したわね。」

マリッサが言いました。「私、大人の人が、それも、特に先生である人がそんなふるまいをするなんて、全然思ってもみませんでした。そのくらい分かっているはずですよ。」

「そうね、マリッサ。私達は そのくらい 分かっているはずよね。大人達は 小さい 時から ずっと、正しい ふるまい方を 教わって きたし、周りの 人に対して 礼儀正しく 思いやりの ある ふるまいを する という 習慣を 築いて きたわ。」

「ただ、今日の 私の ふるまいは、むとんちゃくだったからじゃないの。実を 言うと、ある 目的が あって、わざと 無作法に ふるまっていたの。無作法な ふるまいを された 側が どんな 気持ちに なるかを 分かってほしかったからよ。」

「なあ～んだ。」 リオラが 言いました。「私達も、時々 他の人に そんなふう に 感じさせて しまっているって ことを 教えよう としていたのね。」

「ええ、そうよ。」と ギニソン先生が 答えました。「みんな、素晴らしい 子供達 だけど、時々 周りの 人達に 対して、かなり 思いやりが ない ことも ある わよね。」

私達が 他の人 に対して、もっと 礼儀正しく して 尊敬を 示せる 点は、ある かしら？」 ギニソン先生が 質問しました。「1か月の間、私達が 働きかける べき 点を、忘れないように ホワイトボードに 書いておきましょう。そして、1か月の 終わりに、どれだけ 進歩できたかを 話し合うのよ。」

「それと、十分 進歩 できてたら、お祝い できるかな？」と ウィリアムが 聞きました。

「もちろんよ。」と、ギニソン先生が 答えました。「どんな お祝いが したいかしら？」

みんなの 手が あがりました。そして、みんな 順々に、どんな 点で もっと 礼儀正しく したら いいと 思うかや、進歩を 祝うための アイデアを 話した のでした。

